

弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の遺跡群

石 川 日出志

【要旨】男鹿半島は、東北地方で弥生時代遺跡が集中する地域のひとつである。これらの遺跡群は寒風山東麓の台地の縁と八郎潟南側の天王砂丘列上の 2 つの地形環境に立地する特徴をもつ。こうした対照的な立地の遺跡が近接する遺跡群は、東北地方の他地域ではみられないが、砂丘列上に弥生時代中期の遺跡群が形成される点は、南へ約 200km 離れた新潟平野と酷似する。男鹿半島の弥生時代遺跡の存続期間はなお不明な点が多いものの、中期初頭から一段階下った横長根 A 式土器を出土する例が多い。この段階に、北陸では本格的な稲作農耕集落が各地に定着しており、新潟平野北部域でもこの段階から中期末まで新潟砂丘内陸寄りの砂丘列上に集落群が形成される。男鹿半島の砂丘列における集落群形成は、新潟平野の遺跡群動向が関係するとみるべきである。

また、新潟平野では、中期初頭から後半までほとんどの遺跡が低地に営まれていたのが、中期末になると突如丘陵上に立地する遺跡が出現する。ちょうど秋田方面で形成された宇津ノ台式土器が新潟平野北半に波及してくる段階であり、秋田方面の集落占地方式が導入されたものと判断できる。

はじめに

2011 年 10 月 8・9 両日、男鹿市および男鹿市教育委員会と明治大学古代学研究所の共催で「船川港築港 100 周年記念事業 男鹿市文化財シンポジウム＜秋田の米づくりはじまる—2000 年前から現代へ—＞」を開催した。筆者は当日、「2000 年前の稲作と東北・秋田」と題する基調講演を担当し、九州から南関東までの水田稲作と集落の基本的特徴を紹介するとともに、東北地方への稲作導入の経緯と、東北における集落と耕地の関係が西日本とは異なることを述べた。しかし、こうした課題に関する研究の要点を述べたものであり、本研究紀要に相応しいとはいえない。そこで本稿では、男鹿地域の主だった弥生時代遺跡とその出土資料を実見した際に注目した遺跡群の立地と、新潟平野の動向とのかかわりに焦点を絞って論じたい。

東北地方の弥生時代研究に関しては、仙台平野と津軽平野を除くと遺跡群研究の蓄積は少ない。また、地域間の関係を読み解く試みも多くはない。現状ではなお発掘調査データが限られているとしても、東北地方の遺跡群研究には様々な魅力的な課題があることを例示したい。

1. 男鹿半島における弥生時代遺跡の立地と時期

(1) 遺跡の分布と立地

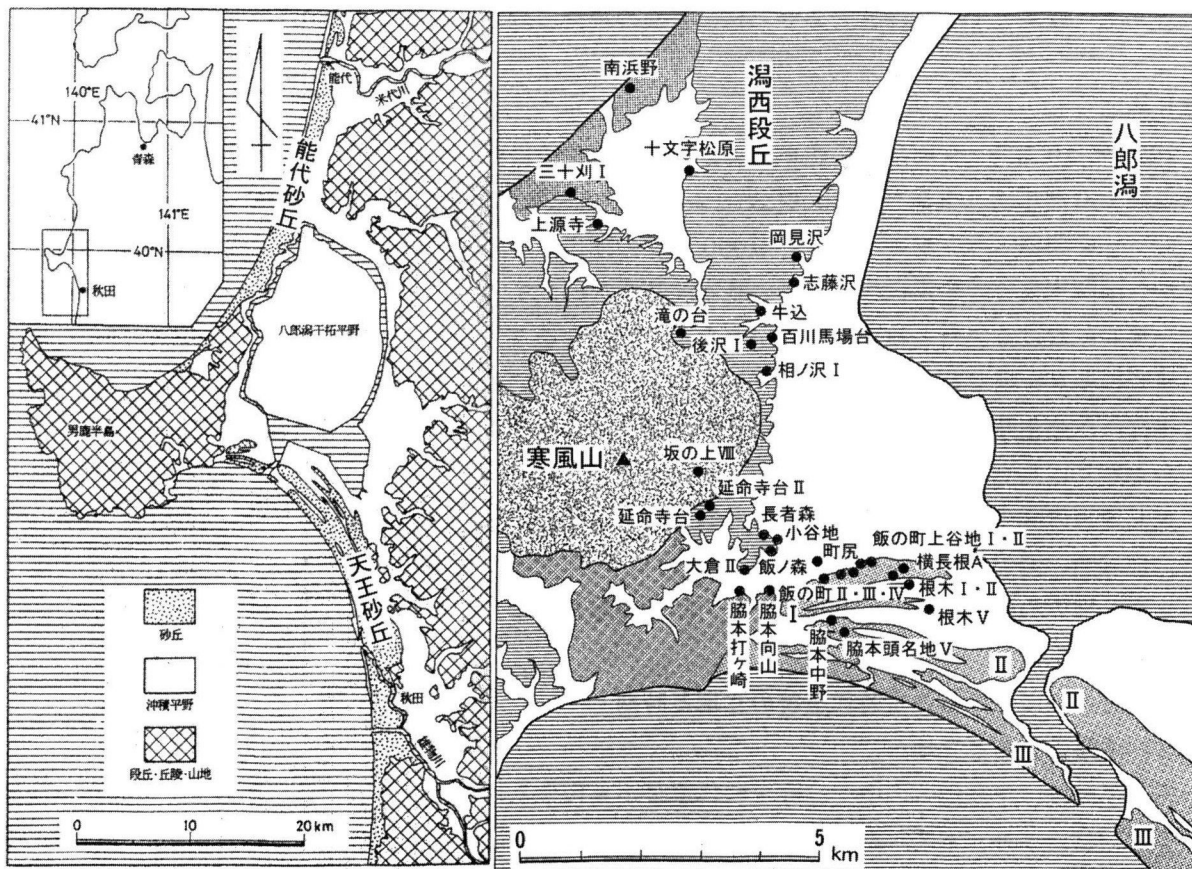
男鹿半島は、東北地方の中で、弥生時代遺跡が集中する地域のひとつとして知られている。秋田県内では、秋田平野、本荘平野、横手盆地、大館・花輪盆地に弥生時代遺跡が知られているが、そのうち秋田平野の遺跡群は秋田平野の東縁の台地縁辺と男鹿半島東部に多くが知られている。各地域における遺跡の立地にはかなり明瞭な差異があり、男鹿半島東部では寒風山東麓台地の縁と八郎潟南側の

天王砂丘列という2通りの対照的な立地の遺跡群が併存する。昨秋のシンポジウムで、児玉準氏が、こうした男鹿半島の遺跡立地が稲作の受容に伴うものである点を強調するとともに、男鹿半島北西部の茨島遺跡・大坂下遺跡や北秋田市森吉山ダム建設地内の小規模な弥生時代遺跡のように、縄文時代以来の立地の遺跡も少ないながら存続する点にも注目すべきことを指摘した。児玉氏に導かれながら、本稿では男鹿半島東部の遺跡群の立地や時期の特徴を整理し、その由来や背景を考えてみよう。

男鹿市内では弥生時代遺跡として32か所が登録されており(秋田県教委2003)、うち30か所が男鹿半島東部に所在する。第1図には、児玉準氏が紹介された牛込遺跡(泉・児玉1984)と町尻遺跡(児玉1984:11・14頁)を加えた32遺跡をプロットした。その分布をみると、次の3つのまとまりを見出すことができる。

- ①寒風山東麓の台地・丘陵および潟西段丘の東縁： 岡見沢遺跡、志藤沢遺跡、牛込遺跡、百川馬場台遺跡、後沢Ⅰ遺跡、相ノ沢Ⅰ遺跡、延命寺台遺跡、延命寺台Ⅰ遺跡、長者森遺跡、飯ノ森遺跡、大蔵Ⅱ遺跡、脇本打ヶ崎遺跡、脇本向山遺跡。
- ②天王砂丘列および沖積地： 小谷地遺跡、町尻遺跡、飯の町Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、飯の町上谷地Ⅰ・Ⅱ遺跡、横長根A遺跡、根木Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ遺跡、脇本中野遺跡、脇本頭名地Ⅴ遺跡。
- ③男鹿市五里合地区の沖積地をめぐる段丘および砂丘上： 三十刈Ⅰ遺跡、南浜野遺跡、十文字松原遺跡、上源寺遺跡。

このうち①は、志藤沢遺跡周辺と飯ノ森・長者森両遺跡周辺の2群があり、後者は②の遺跡群と隣接する。そして、②に含めた小谷地遺跡は、段丘下に形成された微高地上に遺跡の本体があると考えられ、飯ノ森・長者森両遺跡にすぐ近接するので一連の遺跡群とみるべきである。



第1図 男鹿半島の地形分類と弥生時代遺跡の分布と立地

②の遺跡群がのる天王砂丘（注 1）は、完新世に形成された並列砂丘で、内側（北側）から形成順に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ砂丘と大別され、第Ⅰ砂丘の海寄りを第Ⅰ'砂丘と呼んで区別する場合もある（松本 1984）。②の遺跡群の多くは、もっとも内側の第Ⅰ砂丘上にあり、第Ⅰ砂丘の南斜面に位置する根木遺跡（児玉 1984a：14 頁）以外は中央ないし北斜面に集中する。根木Ⅴ遺跡は第Ⅰ'砂丘列の延長線上、脇本中野遺跡と脇本頭名地Ⅴ遺跡は第Ⅱ砂丘列上にある。

このように男鹿半島八郎潟周辺で弥生時代遺跡の分布が偏るのは、もっぱら第四紀の地殻変動による。日本海東縁部には 4 帯の隆起帯が縦走し、男鹿半島を含む奥尻帯と出羽山地の出羽帯の隆起帯の間に八郎潟・秋田湾地溝帯がある。縄文海進時にこの地溝帯に八郎潟水域が形成されたが、更新世中期から完新世を通してこの一帯が北東方向に沈下したために、北側の能代砂丘は位置を変えずに累重砂丘となって周囲に沖積地は形成されず、一方沈下が緩い南側は海退に伴って砂丘が前進して並列砂丘となり（白石 1990）、その周囲に沖積低地が形成され、弥生時代になって低地に水田、砂丘上に集落が営まれることになった。しかし、こうして形成されたために灌漑に必要な河川水は十分確保しにくいという制約も抱えるのがこの地域であり、江戸時代に砂丘列間に溜池が造成されるのはこうした条件を如実に物語っている。

（2）編年の大枠と広域編年

では、これらの遺跡がどの時期に営まれ、遺跡群の消長はどのような特徴をもつであろうか。

秋田県域の弥生時代中期土器の編年については、近年根岸洋氏が志藤沢遺跡出土資料の再調査に基づいて検討した成果がある（根岸 2005・2006・2007b）。根岸氏は、甕形土器の口・頸部の形態変化を基準として、〔寒川Ⅰ段階→横長根A式古段階→横長根A式新段階→松木台Ⅰ段階・宇津ノ台Ⅰ群→三十刈Ⅰ段階・宇津ノ台Ⅱ群（古い部分）・志藤沢Ⅲ類→志藤沢Ⅳ類・宇津ノ台Ⅱ群（新しい部分）→はりま館Ⅰ群〕という編年を提唱する（根岸 2006・2007b）。基本的な変遷観は承認し得ると考えるが、次のようになお検討を要する点もある。

- ①. 横長根A式をさらに古段階と新段階に区分する際に、新段階の基準として、横長根A遺跡の遺構（第1号竪穴住居跡・湧水）出土資料をあげて、甕Ⅰa類でも「口縁部に沈線1条を引き、古段階と比べて立ち上がった頸部に縦方向の刷毛目調整痕を残す甕が特徴的」で、「副要素が増えて複雑化し、交点付近が雷文状を呈する変形工字文を施文する鉢・壺が含まれる」とみる（根岸 2006：7 頁）。しかし甕は、第1号竪穴住居跡出土では口縁部破片4点、湧水では8点あるが、ハケメを消す横ナデを施す例がそれぞれ1・2点含まれるなど、区分が明解ではない。要は、ハケメ整形がいつどのように出現するかを確認する必要がある。

また、交点付近が雷文状を呈する変形工字文も、第1号竪穴住居跡の鉢3点は同一個体の可能性があり、湧水では壺破片1点にすぎない。

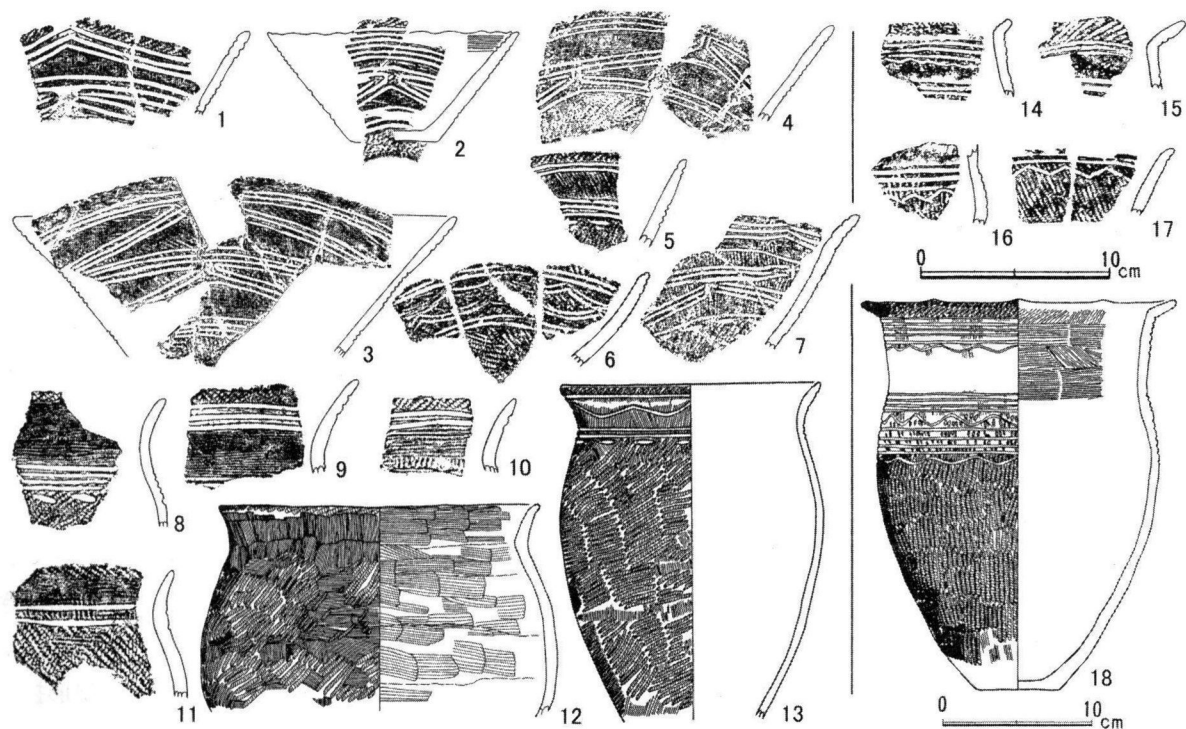
- ②. ①のような問題があるにもかかわらず、「横長根A遺跡出土土器のうち、寒川Ⅰ段階・遺構（第1号竪穴住居跡・湧水）出土土器・宇津ノ台Ⅰ群に類する連弧文を有する土器群・後期の天王山式に並行する土器群をのぞいて残った遺構外出土土器」を古段階とする（根岸 2006：7 頁）。つまり、横長根A遺跡遺構外出土のⅠ類（根岸 2005）から新段階を除いたものを古段階とする。新段階がきわめて限られた資料を基準とするのであるから、古段階はより明確な基準を示すべきであろう。
- ③. そもそも甕の分類が、形態とハケメの有無を基準としており、同時に行われるべき成・整形技法に関する検討が乏しい。また、寒川Ⅰ段階の甕で、2005 論文で分類した甕に対応するのは報告書（利部ほか 1988）のXⅠ群1～3類であるべきなのに、2006 論文では小形精製甕X群1類をあてると、検討方法の一部に問題がある。

④. 宇津ノ台式に特徴的な甕が形成される過程を基軸に編年を組む意図は理解できるが、豊富な装飾をもつ浅鉢・台付浅鉢（高杯）類に関する検討が不足である。

したがって、意欲的な論考ながら、なお検討を要する根岸提案に基づいて本稿で遺跡群を分析するのは適切ではない。しかし根岸提案に替わる有効な編年を提示することも現在の筆者には果たすことができない。そこで、本稿では、前期の「地藏田」段階に後続する中期に関しては、寒川Ⅰ段階→横長根A式→三十刈Ⅰ段階→宇津ノ台式の4段階という大枠でのみ検討することとする。これは、根岸提案の「横長根A式古段階→新段階」、「松木台Ⅰ段階→三十刈Ⅰ段階」をそれぞれ一段階にまとめ、かつ宇津ノ台式の細分を留保するものである。以下にそれぞれの基本的特徴を簡潔に記す。

〔寒川Ⅰ段階〕： 装飾性に富む浅鉢・台付浅鉢類に津軽地方の五所式土器（大坂 2010）と共通する特徴が明瞭で、砂沢式段階の浅鉢・台付浅鉢類と比べて器壁が薄手で、構図を描く沈線は細く、複線化が顕著となる。甕は砂沢式からの伝統が色濃く、大形甕は、括れた頸部から短い口縁部が丸く外反し、頸部下に沈線1～3条横走する例が1/3を占める。小・中形の甕は口縁部と肩部が文様帯となる。甕のハケメ調整は前期の地藏田段階と同様、少数派である。

〔横長根A式〕（第2図1～12）： 装飾性に富む浅鉢・台付浅鉢類は体部が直線的に開き、寒川Ⅰ段階までみられた肩部の屈曲はなくなる。体部装飾は、変形工字文系だけでなく、数条の横線帯を上下に重ねる器種（5）も明瞭である。変形工字文系は、描線が太めと細めの二者があるのを直ちに古・新と判断するのは躊躇するが、交点が簡略化した連弧文の6・7は後続型式に近い。甕は、寒川Ⅰ段階に比べてハケメ整形が顕著になる。頸部外面全面にミガキを施す8や横ナデする11、上半のみ横ナデする9、ハケメをそのまま残す10・11など、頸部の整形は多彩である。そして、頸部上方を強くつまんで口縁部を外反させる手法（児玉 1984a：第41図1）は、後続型式に特徴的な口頸部形態を生む要因とみられる。13の頸部上方の鋸歯文は後続型式で盛用されるが、13は内面全面にミガキやナ



第2図 横長根A式土器(1～13)と後続する三十刈Ⅰ段階(14～18)の土器

デを施して平滑にする横長根 A 式に特徴的な整形法である。根岸氏が古・新の 2 段階に細分したように、特徴の変異の大きさを見ると将来的には数段階に細分することになるだろう。

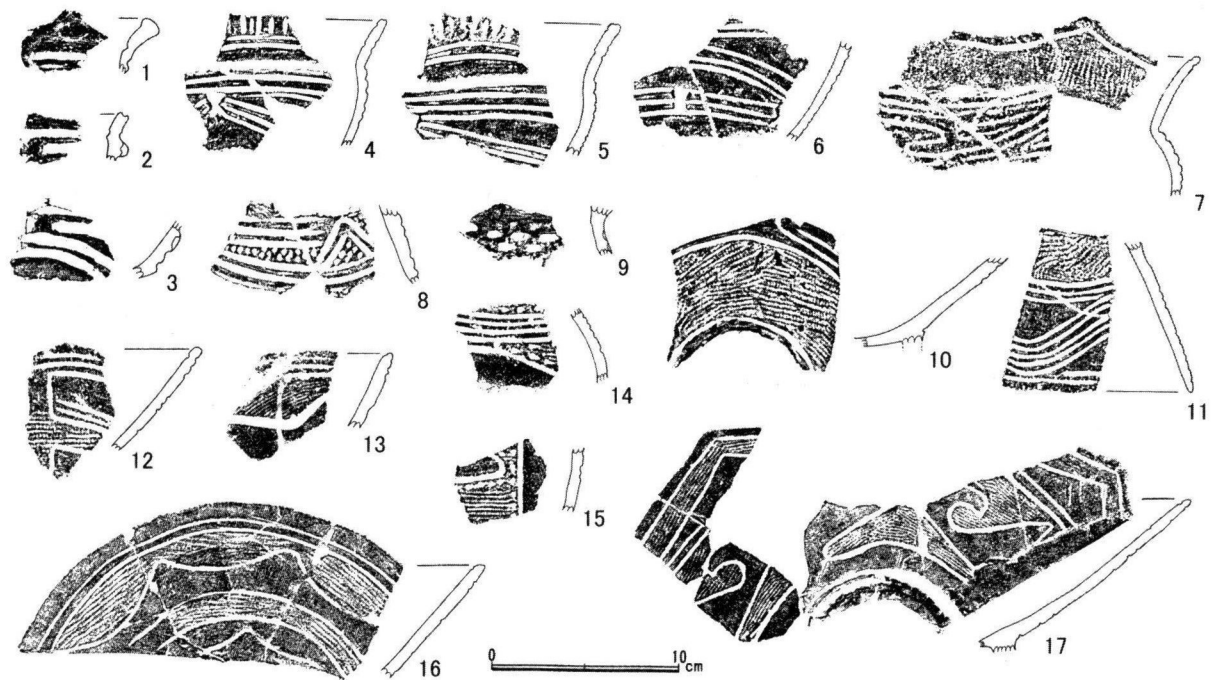
〔三十刈 I 段階〕（第 2 図 14～18）： 甕は、筒形の頸部から口縁部が屈曲して開く形態が多数となり、頸部上半と体部上半の文様帯に鋸歯文や波状文が顕著となる。頸部上方の沈線帯は、横長根 A 式では 1～3 条であるのに対して、この段階では 3～6 条と多条化する（14・15・18）。内面整形は、横長根 A 式と異なり、内面のミガキやナデが省略される例（18）が目立つ。

〔宇津ノ台式〕： 甕は、筒形頸部に重菱形文、浅鉢類では連弧文が多用される。磨消縄文の有無を直ちに古・新とみなす向きが多いが、北上川流域の橋本式を考えると注意を要する。

次に、のちほどの議論のために、広域編年（第 1 表）にも若干ふれておく。

第 1 表 東北地方の弥生時代中期土器広域編年

	下越	会津盆地	仙台平野	北上川流域	秋田	津軽平野	渡島半島
前期	緒立式	御代田式	十三塚東 D	(金附Ⅲ群)	(地蔵田)	砂沢式(古)	(国立療養所裏)
						砂沢式(新)	
中期	猫山式	(宮崎3次)	原式	谷起島式	(寒川Ⅰ)	五所式	二枚橋式
					横長根 A 式	垂柳1式	
	(＋)	南御山2式(古)	高田 B 式	川岸場式		垂柳2式	恵山Ⅰ a 式
		南御山2式(新)				垂柳3式	恵山Ⅰ b1式
	(＋)	二ツ釜式	中在家南式			(三十刈Ⅰ)	
		山草荷式	川原町口式				
十三塚式	橋本式			恵山Ⅱ b式			



第 3 図 横長根 A 遺跡の他地域型式と関係する土器

横長根 A 遺跡では、横長根 A 式が圧倒的多数であるので、その広域編年上の位置も、周辺地域の型式の搬入品や関係ある資料から追跡が可能である。第 3 図に横長根 A 式の範疇外とすべき資料の代表例を示した。同一個体と考えられる 4~6 は、屈曲ある器形、太い沈線、交点の深い挟り、口縁部の縦刻目のいずれも横長根 A 式ではない。8 とともに五所式であろうか。7 の器形と肩部の波状工字文は二枚橋式の特徴であるが、口頸部外面が施される点は津軽の垂柳 1 式の小形台付深鉢との関係を考えるべきかもしれない。大館市粕田遺跡に類似例がある。10・12・13・16・17 は北上川流域からの、搬入品の可能性が高く、11・14・15 はその在地模倣品であろう。湧水出土の 10 は谷起島式古段階と考えられ、寒川 I 段階に併行するとみられる。12・13 は谷起島式中・新段階、14・15 は谷起島式新段階かその直後の川岸場式古段階、16・17 は川岸場式古段階に対比できる(石川 2005c)。横長根 A 式の資料がまとまる大倉 II 遺跡でも谷起島式中・新段階と川岸場式古段階の搬入品と思われる浅鉢類と壺が見られる。したがって、横長根 A 式は、北上川流域に対比すると谷起島式中~新段階から川岸場式古段階に併行すると判断できる。そして川岸場式古段階を介して仙台平野の高田 B 式(椀形式古段階)、さらに南東北の南御山 2 式と接点をもつとみなすことができる。

それから宇津ノ台式土器は、北上川流域の岩手県奥州市橋本遺跡で橋本式に少数伴っている。また後述するように、新潟方面では新発田市山草荷遺跡をはじめ多数の検出例があり、北陸の小松式の新しい部分や南東北の川原町口式土器と共伴するので中期後葉~末まで下ることが明らかである。以上の大枠編年に基づいて、次に男鹿半島の弥生時代遺跡群の盛衰をみてみよう。

(3) 遺跡群の盛衰

男鹿半島の弥生時代遺跡群のうち、質・量とももっとも充実するのは、1982・83 年に発掘調査された横長根 A 遺跡である。横長根 A 遺跡出土土器は、横長根 A 式に属する資料がもっとも多数を占める。それ以外にも、遺構外から前期の砂沢式土器(第 3 図 1~3)、三十刈 I 段階~宇津ノ台式(児玉 1984a : 第 71 図 3・第 82 図 1~3)、宇津ノ台式(児玉 1984a : 第 71 図 1・2)がわずかにみられる。中期初頭を欠かかにみえるが、先に述べたように、谷起島式古段階に対比できる土器が確認で

第2表 男鹿半島東部の弥生時代遺跡出土土器の時期

		前 期	中 期				後 期		参考文献
		地蔵田	寒川 I	横長根 A	三十刈 I	宇津ノ台	天王山	(後半)	
台地上	岡見沢			○					小玉 1975
	志藤沢		○	◎	○	○	○		奥山 1966・小玉 1975・ 根岸 2005・根岸 2007b
	牛込			○		○		○	泉・児玉 1984
	相ノ沢 I	○		○					小玉 1975
	延命寺台	○							大高 1984
	飯ノ森			○	○	○			磯村 1966・小玉 1975
	大倉 II		○	◎	○	○	○		児玉 1987
	脇本向山	○		○	○		○		磯村 1966・小玉 1975
台地下・ 砂丘列	小谷地			○	○	○	○		富樫 1967・高橋 1982
	横長根 A	○	○	◎	○	○			児玉 1984b
	飯ノ町			○	○	○	○		小玉 1975
	根木			○					小玉 1975・児玉 1984b

きるので、寒川Ⅰ段階にも遺跡は存続すると判断する。

このようにして、男鹿半島東部の遺跡について、立地を台地上と台地下・砂丘列に二分した上で、それぞれの存続時期を確認して、遺跡群の消長の特徴を見てみよう（第2表）。すると、前期の地蔵田段階から中期初頭寒川Ⅰ段階まではそれぞれ1～2遺跡にとどまり、確認できる土器もわずか数片にすぎない。ところが横長根A式になると、遺跡数は飛躍的に増加する。というよりも、資料が公表された12遺跡のうち、類遠賀川系土器の甕1点のみの延命寺台遺跡を除く11遺跡で横長根A式がみられる。しかも資料が多い志藤沢遺跡・大倉Ⅱ遺跡・横長根A遺跡では圧倒的多数を占めており、その他の遺跡も横長根A式が多いようである。そして三十刈Ⅰ段階と宇津ノ台式は各遺跡とも資料数は少ないものの7遺跡、後期前半の天王山式段階は1～2点の土器が確認できる5遺跡と順次減少する。後期後半の資料はほとんどなく、わずかに牛込遺跡で後北C1式かと思われる縄文土器破片があるにすぎない。つまり、台地上と台地下・砂丘列という立地の違いはあれ、横長根A式段階に遺跡と資料が急増し、その後ふたたび資料数および遺跡数が減少する傾向を読み取ることができる。男鹿半島東部においては横長根A式段階で急激なピークを見せる。そして、この地域から東南に約15km離れた八郎潟東南部にある秋田市潟向Ⅲ・Ⅳ遺跡（奥山1966・根岸2007b）でも横長根A式土器が明確であるのも、これと歩調を合わせた動向とみられる。

それではこうした遺跡群動向はどのようにして起こったのであろうか。この問題を解く糸口が、男鹿半島から南へ約200km離れた新潟平野北部（下越）にある。

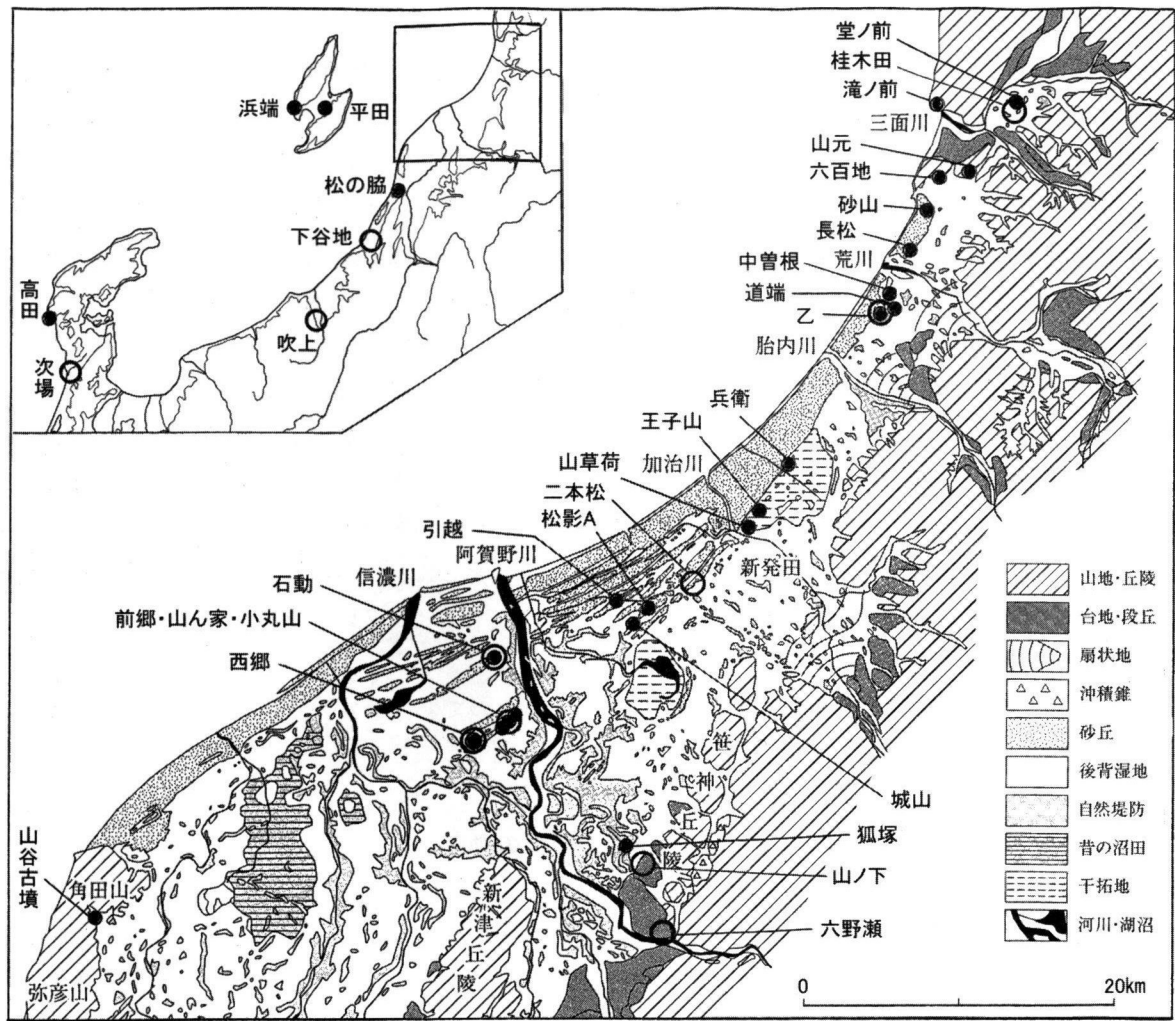
2. 新潟平野北部砂丘地帯における弥生時代中期遺跡群の動向

（1）遺跡の分布と中期前～中葉の画期

新潟平野北部の海岸線を縁どる新潟砂丘は、総延長約80km・最大幅約10kmに及ぶ日本海側最大の砂丘であり、その内陸寄りに多くの遺跡が残されている。砂丘は10列にも上り、遺跡の形成年代を手がかりとして内陸側から形成年代順に新砂丘Ⅰ（Ⅰ～4）・Ⅱ（Ⅰ～4）・Ⅲ（Ⅰ・2）と区分されている（新潟古砂丘研究グループ1974・田中ほか1996：注2）。加治川以南では10列の並列砂丘であるが、胎内川以北では新砂丘ⅢがⅡ・Ⅰを覆う累重砂丘となる。阿賀野川下流域では流路が砂丘列を浸食し、信濃川下流域では完新世で150m内外も沈降したこと（新潟県地盤図編集委2002）により地表には現れていない。

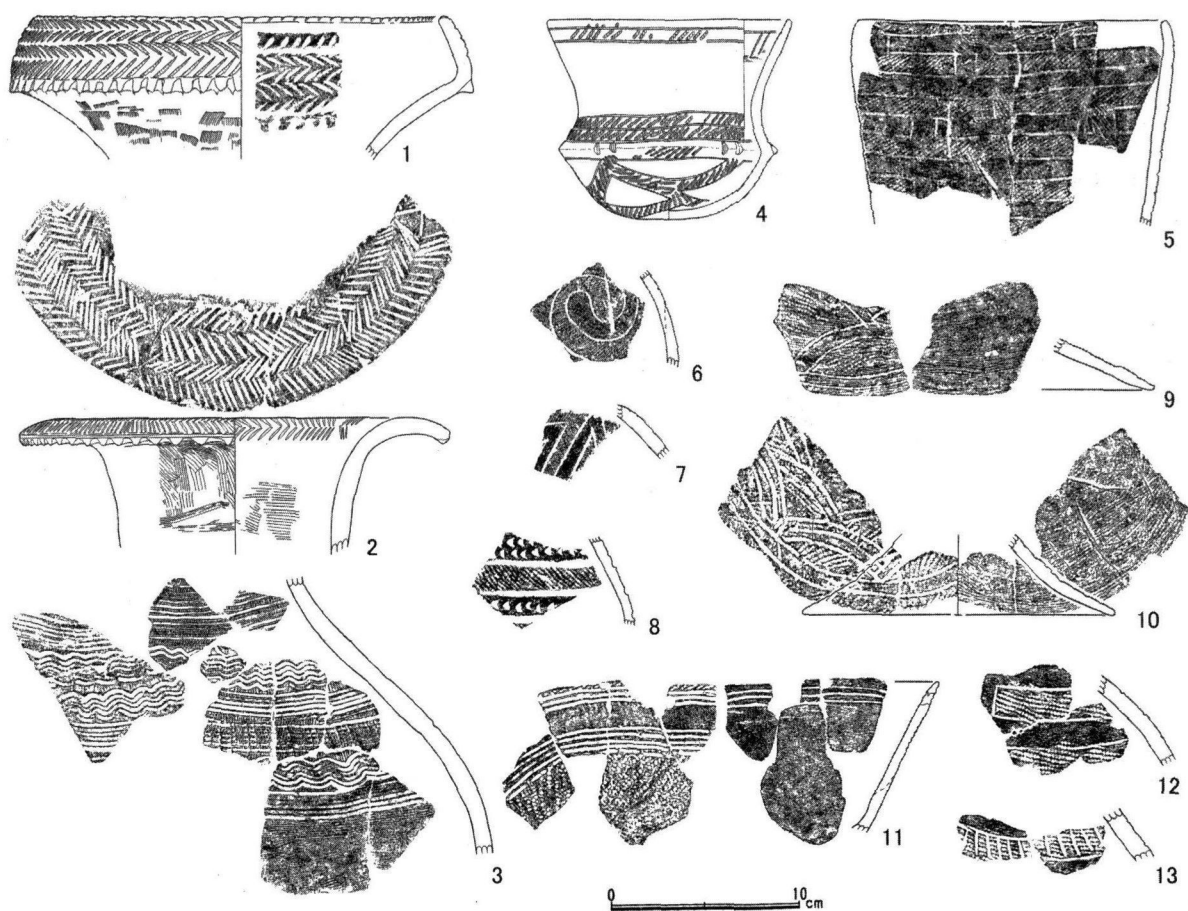
新潟平野北部における遺跡分布の推移を概観すると、縄文時代前期から弥生時代中期初頭までは平野東方の台地や山間部と砂丘地帯という二通りの立地が併存する。縄文時代晩期末までは台地・山間部側に生活の主たる舞台があったと考えられるが、弥生前期から中期初頭は、平野側が主となった可能性が高いが、まだ判然としない。ところが、中期でも一段階下る段階になると、台地・山間部の遺跡は一斉に姿を消し、砂丘地帯の遺跡だけとなる。そして中期後葉～末になると、砂丘地帯の遺跡が一気に増加するだけでなく、北部の村上界限ではふたたび丘陵・台地上に立地する遺跡が現れる。

男鹿半島との対比を見るために、第4図に弥生時代中期前葉～中葉の遺跡を○、中期後葉～末の遺跡を●で示した。村上市砂山遺跡から新潟市江南区西郷遺跡まで新潟砂丘内側の新砂丘Ⅰ・1～4上（兵衛遺跡以南）か砂丘列内側（乙遺跡以北）に直線的に並び、阿賀野川付近では新潟市北区引越遺跡や東区石動遺跡のように新砂丘Ⅱ・1・2にも遺跡が形成されている。これ以外にも阿賀野川が越後山地から平野部に抜けた阿賀野市域の低台地～自然堤防上の遺跡群（注3）と、台地・丘陵上と低地部の双方に遺跡が残される北部の村上市一帯の遺跡群がある。台地・丘陵上の遺跡が少ない点と、遺跡分布の広がりには違いはあるものの、男鹿半島の弥生時代遺跡とよく似た立地である（注4）。



第4図 新潟平野北部の中期前～中葉の遺跡(○)と宇津ノ台式系土器出土遺跡(●)

これら砂丘地帯周辺の遺跡群がどのように形成されたかについては、いまだ調査が十分ではないものの、これまでに集積されたデータからでも概略はつかめる。上記のように、砂丘地帯には縄文時代前期から断続的に遺跡が形成されており、特に縄文時代晩期後半（鳥屋1式）～末（鳥屋2式）になると、新潟市北区鳥屋遺跡（関ほか 1988）や新発田市青田遺跡（荒川ほか 2004）のような、台地・山間部の遺跡にひけをとらないほど大規模な集落遺跡が形成されることが注目される。しかし、この2遺跡はともに弥生時代前期までは継続せず、廃絶されてしまう。しかし、この2遺跡と同じ鳥屋1・2式段階は遺物量の少ない遺跡であったのが、弥生時代前期から中期初頭にかけて最盛期を迎える遺跡がある。新潟市西区緒立遺跡（黒埼町 1998）・江南区西郷遺跡（土橋ほか 2009）・阿賀野市猫山遺跡（古澤ほか 2003・2010）がそれで、このうち緒立・猫山両遺跡は中期初頭でほぼ終焉を迎えるが、西郷遺跡はさらに中期後葉まで継続するこの地域唯一の遺跡である。そして新潟平野では、緒立遺跡や猫山遺跡が姿を消した中期前葉～中葉から、再び遺跡が増加し始める。中期前葉～中葉では、西郷遺跡の他に、石動遺跡（石川 2000）・江南区山ん家遺跡（石川 2000）・聖籠町二本松遺跡（新潟県 1983）・胎内市乙遺跡（関ほか 1988）・村上市桂木田遺跡（平田 2009）がある。西郷遺跡以外は、地表採集資料や小規模な発掘による断片的資料にすぎないが、小松式土器の古い部分（八日市地方 7・8期：福海 2003）や南御山2式土器および併行期土器がみられる。砂丘地帯一帯に広く遺跡が形成され始めた点に注目したい。



第5図 新潟市西郷遺跡における転換期の土器

1～3:小松式, 4～7:南御山2式, 8:栗林1式, 9・10:折衷系土器, 11:横長根A式, 12・13:川岸場式

この段階の意義を説明するために、西郷遺跡で出土したこの段階の土器の代表例を第5図に抽出した。小松式の壺形土器（1～3）のうち、受口状口縁の1は直立部が内湾し、口縁屈曲部も貼付突帯に刻目を施しており、東海系条痕文土器である岩滑式の形態を留める。2は口縁部が大きく開き、その内面（上面）に幅広く羽状文を施しており、大地型土器の伝統を留めている。胴上部破片3は、太い櫛歯による直線文・波状文・簾状文を密に重ねる。1～3ともに小松式土器が定型化して間もない段階（八日市地方7期）に対比できる資料である。弥生時代中～後期の北陸と長野県域北部（北信）を中継する拠点となる本格的農耕集落である上越市吹上遺跡でもっとも古い段階の小松式土器と同じ段階に属す。小松式土器成立の中核遺跡である石川県小松市八日市地方遺跡の集落が飛躍的に拡大するとともに、小松式土器が富山・新潟方面に一気に分布を拡大する段階に当たっている。そしてその影響はさらに北信にも及び、栗林式土器という新しい製作技術と器種構成をもつ土器型式が成立する契機となった。これらの土器は、北陸一帯のこうした歴史動向が西郷遺跡にも及んだことを示す重要資料というべきである。次に4・5は、仙台平野の本格的農耕社会を形成している集団の土器型式である高田B式土器の影響が福島県域に及んで在来伝統と折衷して形成された南御山2式古段階の資料で、ともに器形に在来伝統を明瞭に留めている。6・7も南御山2式の壺形土器である。こうした小松式土器と南御山2式土器が新潟平野の中央部で共存する状況は、東日本や東北日本の弥生時代社会の再編期を考える重要な糸口であると考え（石川2000）。

（2）小松式と横長根A式を仲介する類型

西郷遺跡でもう一つ注目すべき点は、秋田・男鹿方面との関わりを読み解く糸口が見える点である。

調査報告書を作成する過程で資料を観察した際に、もっとも注目したのが遠隔地系土器の多彩さであった。1～3の小松式土器だけでなく、これまで新潟県内はもちろん近隣地域では出土例のない福島県いわき地方の龍門寺式土器と北上川流域の川岸場式土器も確認できた。12・13が川岸場式の壺形土器の胴上部破片で、横長の長方形構図内に縄文の条を横走させる点が特徴的であり、13のように短線を重ねる手法も川岸場式に散見される。問題は、どのルートで川岸場式という遠隔地の土器が新潟平野にもたらされ得るかである。仙台平野でさえ川岸場式土器は稀な存在で、福島県域では1点も検出例はないから、当然候補地からははずされる。そこで浮上するのが秋田経由の可能性である。本稿1・

(2)で見たように、横長根A遺跡や大倉Ⅱ遺跡では、谷起島式・川岸場式の搬入品が見られるので、仙台・会津ルートよりは可能性が高いと考えたのである。しかし、それ以上具体化することは困難であった。ところが、西郷遺跡に横長根A式との関係を考えるべき資料が存在していたのである。

第5図9～11がそれで、観察した際は11を宇津ノ台式土器とみていた(土橋2009:241頁土器観察表767)。しかし浅鉢11は、①体部が直線的に開く器形、②薄い器壁、③内面と外面無文部の入念なミガキ整形、④外面に無文帯を挟んで上下に3～4条の横走沈線帯を巡らし、下方の横走沈線帯の直下に点列を添える特徴、⑤内面にも3条の横走沈線帯を巡らす、⑥細く浅い沈線、という諸点は、むしろ横長根A式と判断すべき特徴で、横長根A遺跡の第2図5と対比できる。宇津ノ台式という判断は沈線の細さと内面施文に惑わされた判断であり、ここに改めたい。川岸場式12・13と組合せて考えるべき資料であった。

9・10も横長根A式との関係を考える際に注目すべき土器である。2点とも蓋で、内外面をハケメ整形し、外面に大振りで粗雑な連弧文を描き、円弧内に縄文を浅く充填する。この大振りの円弧文は南御山2式古段階4の構図の反転である。県内では、村上市桂木田遺跡に類例がある類型で、同遺跡では口縁部に波状文を巡らす下越に特徴的な深鉢を伴っている。桂木田遺跡の資料は数点と少数ながら、9・10とともにハケメ整形が採用される点が重要である。というのは、秋田県域で、類遠賀川系土器の系譜を引く中期初頭の寒川Ⅰ段階の土器(利部ほか1988)では、ハケメ整形は少数派であったのが、次の横長根A式ではハケメ整形が徹底されるという土器整形技術の変化が起きている。次の三十刈Ⅰ段階～宇津ノ台式でもハケメ整形は盛用されている。そして横長根A式から宇津ノ台式に至るハケメ調整については、すでに1970年に須藤隆氏、1975年に小玉(現・児玉)準氏が新潟平野の山草荷式や北陸の小松式土器に由来すると指摘している(須藤1970・小玉1975)。両氏の段階では、その経緯をそれ以上絞り込むことは困難であったが、ようやく今、それが可能となった。古い段階の小松式土器(八日市地方7期～8期)が新潟平野北部に進出し、そして一部の非北陸系土器と折衷して、ハケメ整形が採用された第5図9・10や桂木田遺跡の一群が形成されたのと歩調を合わせるように、横長根A式にハケメ整形が採用されたとみられる。西郷遺跡の1点(11)を除くと横長根A式は小松式土器と接点はないから、ハケメ整形が直接小松式から横長根A式に引き継がれたと考えることは困難である。資料数はわずかだが、本稿で桂木田タイプと呼ぶこの類型の重要性はここにある。

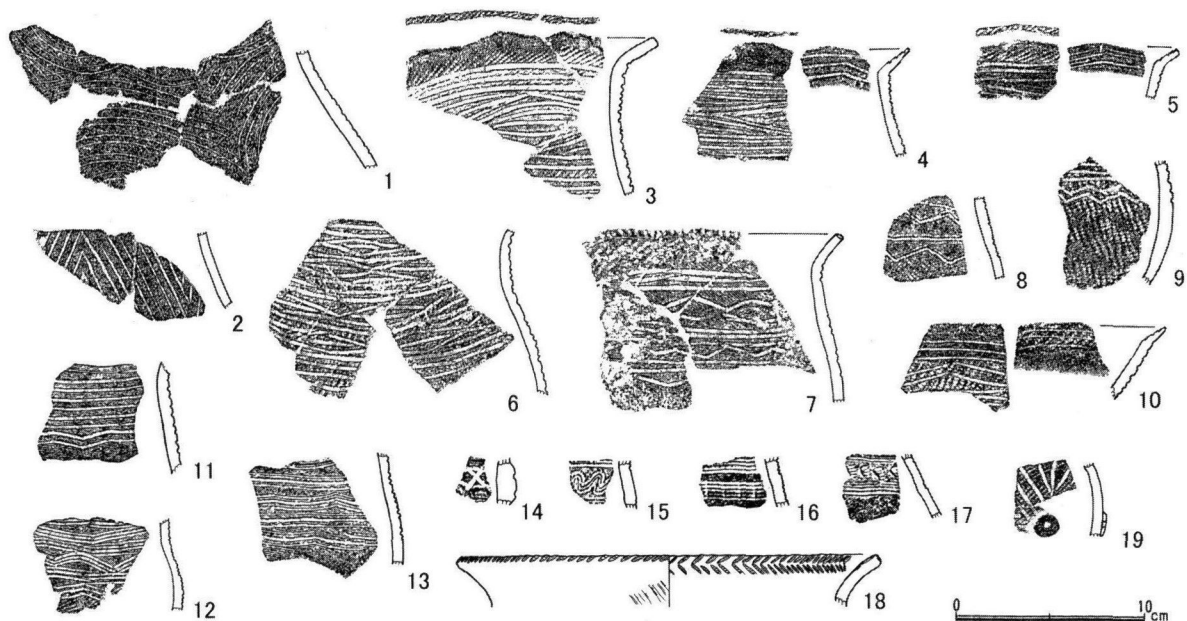
(3) 宇津ノ台式土器の分布拡大と「山草荷式」土器

次に中期後葉～末の状況を取り上げるためにもう一度第4図で遺跡を確認しよう。図中の●印は遺跡であり、そのすべての遺跡で宇津ノ台式もしくは宇津ノ台式の要素をもつ土器が出土している。戦前から、この地域では中期後半～末の型式として山草荷式土器が設定されている。山草荷式は渦巻き文の壺が特徴的で、戦後会津地方の型式として設定された川原町口式土器と一致するにもかかわらず、新潟平野の型式として山草荷式の名称が存続した。山草荷式土器といえば川原町口式の壺を指していたと言っても過言ではない。しかし、これは山草荷遺跡で全形を把握できる壺に川原町口式が目立つ

たために生じた誤解であり、渦巻き文土器がこの地域の土器群の中心をなす訳ではない。

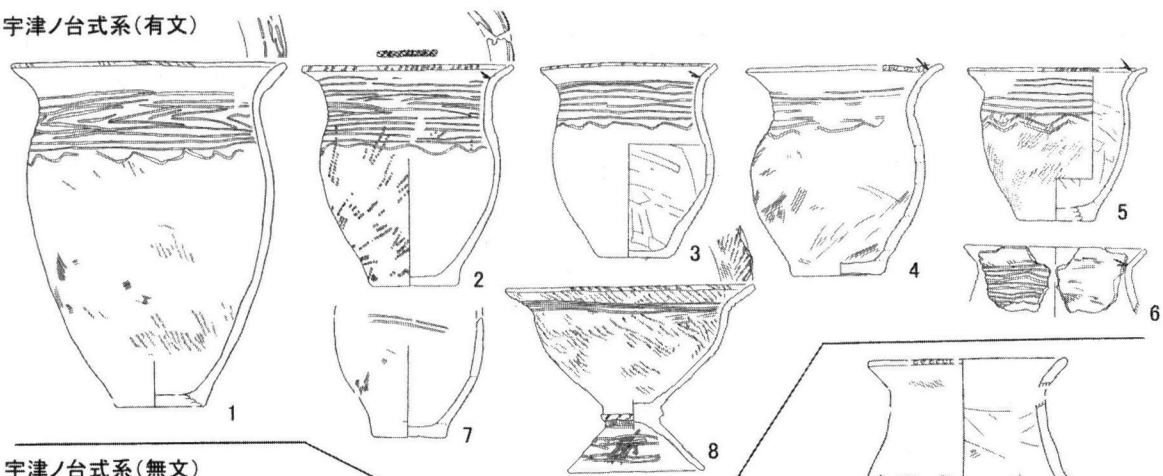
第6図に村上市砂山遺跡出土資料(石丸ほか 2003)を用いてこの地域の型式組成を例示した。大別すると、①1・2は川原町口式の壺、②3・6・9・10は宇津ノ台式の壺(6)と甕(3・5・9)・浅鉢(10)、③7・8・11~13は宇津ノ台式の構図を2~3条の櫛歯で描く一群で、小松式の施文手法を取り入れた一群、④14~17は小松式の壺と甕、⑤19は栗林式の甕、という5類型が組み合わさる。砂山遺跡では②と③が多数(おそらく8割内外)を占め、④がこれに次ぎ、①はさらに少なく、⑤はわずか5点を数えるのみである。山草荷遺跡では、砂山遺跡よりも①と④が多いので地域的な差異を考慮しなければならないが、やはり②と③が多数を占め、⑤は数点にすぎない。そして、川原町口式①は会津方面の土器と胎土・色調・施文法のいずれも一致し、しかも壺が圧倒的多数を占め、甕や有文の小形土器群はごく少数であることから、搬入品の可能性が高い。栗林式⑤は、長野県北部から魚沼郡域までが本来の分布圏であり、中越の各遺跡でも明瞭である。山草荷・砂山遺跡の⑤も、胎土・色調・施文法の特徴から搬入品とみてよい。したがって、この地域で製作されているのは②・③・④の3類型とみるべきである。②は宇津ノ台式の特徴と一致し、④は小松式の範疇に属し、③は宇津ノ台式を基本として小松式の属性を取り込んだ類型であるから、もし山草荷式土器という名称を付すのであれば、③に限定するか、②+③、②+③+④のいずれかでとすべきである(石川 2004)。

新潟平野における中期後葉~末の土器群はこのように複数系統の土器群で構成されるが、このうち宇津ノ台式系統が支配的な位置にあることが分かる資料群がある。第7図は阿賀野市狐塚遺跡(佐藤ほか 2009)の土坑墓群から出土した土器群31点で、1・8・14・26以外は小形品が多く、副葬・祭祀用に製作された土器をかなり含むと考えられる。特徴を整理すると、1~8は宇津ノ台式の甕と高杯(上記①類型)で、甕は筒形の頸部を沈線描きによる粗雑な横長羽状文や横線文の装飾帯とし、下端にジグザグ文を添える。内面の頸部と口縁部の境に軽い稜(図中に矢印を付した箇所)を作り出す技法や、甕・高杯の口縁部内面への施文(1・2・8)が顕著なもの宇津ノ台式と共通する。しかし、3・4のように口端に、縄文ではなく篋キザミを施す点是小松式の属性である。9~14は文様を描かない、縄文のみか無文の一群(甕・壺・鉢・高杯)で、筒形頸部と内面口・頸間の稜、篋ケズリ、および胎

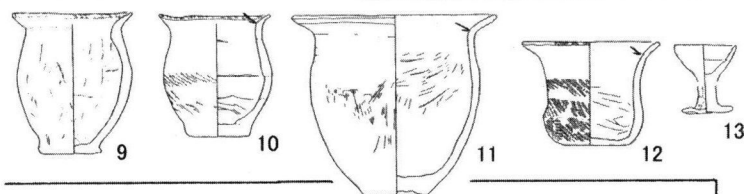


第6図 新潟平野北部の中期後葉~末土器群の型式組成

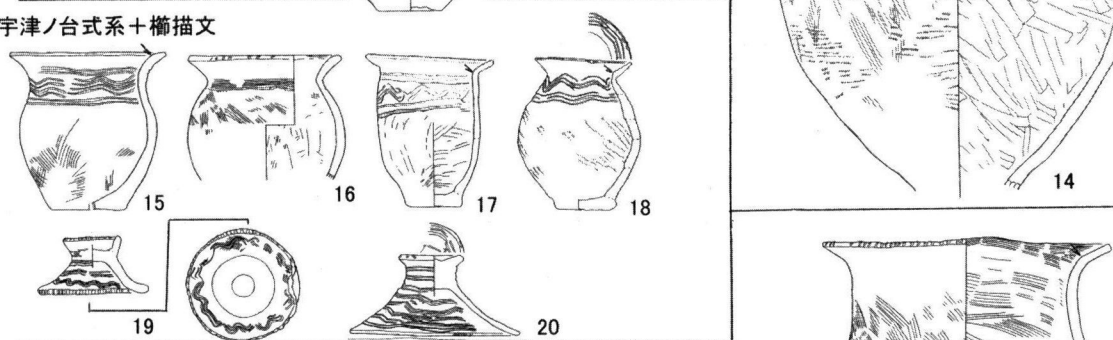
宇津ノ台式系(有文)



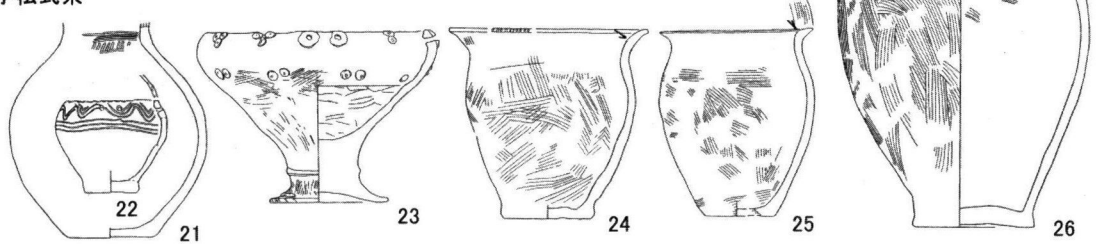
宇津ノ台式系(無文)



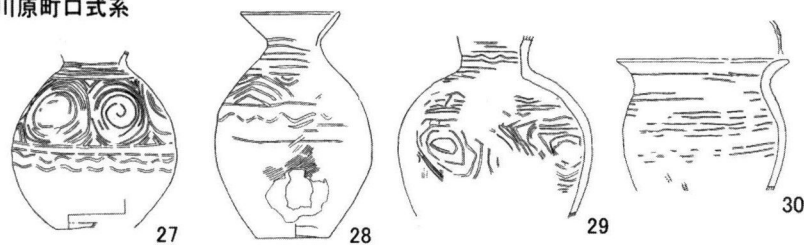
宇津ノ台式系+櫛描文



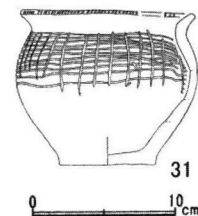
小松式系



川原町口式系



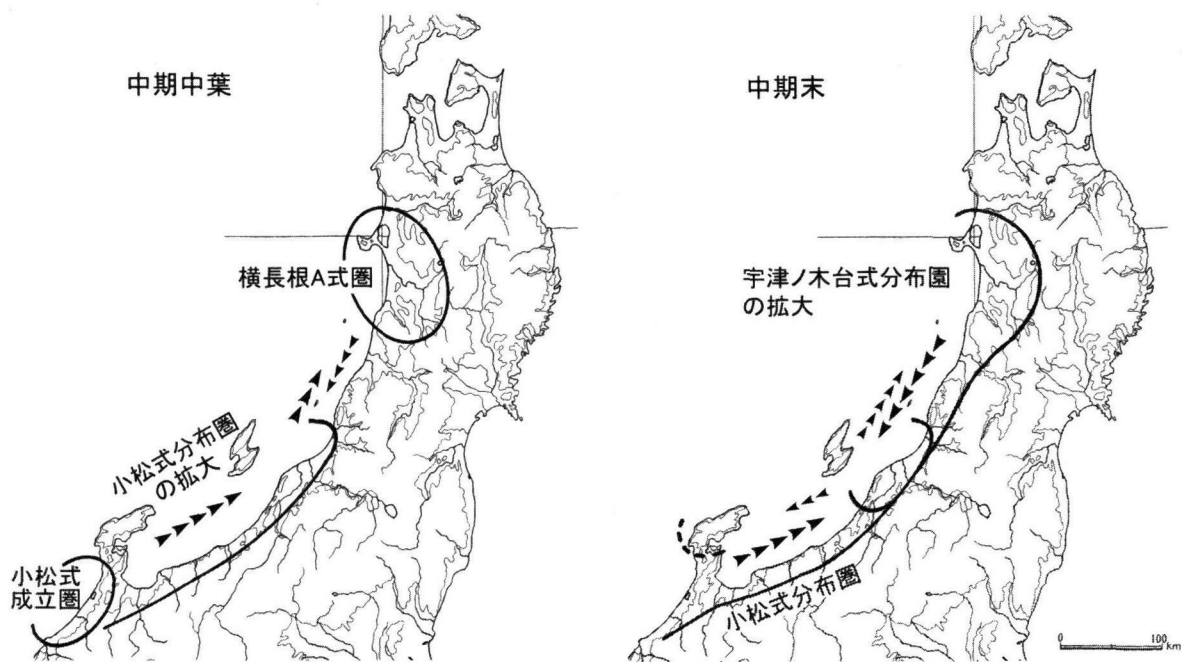
栗林式系



第7図: 宇津ノ台式系統が支配的な阿賀野市狐塚遺跡の副葬土器群

土・色調から宇津ノ台式系と判断した。15～20は宇津ノ台式の構図を、小松式の櫛描き手法の影響により2～4条同時施文した甕・壺・蓋である（上記③類型）。16は頸部形態と口端の篋キザミを重視すれば次の類型とすべきかもしれない。21～26は小松式系の壺・無頸壺（鉢?）・高杯・甕（上記④類型）。22の器形と双孔は小松式の無頸壺に対比できるが、櫛描波状文は③類型の3条櫛歯による大振りの波状文である。高杯23の脚外面のケズリ整形は9・11・13・14と共通し、24～26は一見すると小松式だが内面口・頸間に稜を作り出しているため、22～26とも宇津ノ台式の属性をもつことになる。27～30は川原町口式系土器（上記①類型）の壺（27～29）と有文甕（30）である。しかし、27～29は川原町口式にはない波状文が胴部や頸部にめぐり、28のハケメ整形も川原町口式では採用されていないから、宇津ノ台式系の②・③類型の属性とみるべきである。30の口縁部内面施文も宇津ノ台式に特徴的である。31は判断が難しい土器であるが、強く横ナデして口縁部を外反させる手法と、単位がつかみにくいミガキによる平滑な器面調整、胴部格子目の縦線2か所にみられる逆「形をコの字重ね文の変種とみなして栗林式（⑤類型）と判断する。胎土の異質な点も考慮すると当地域の土器とは考え難い。つまり、狐塚遺跡の土器群は、砂山・山草荷両遺跡と同様に①～⑤類型が揃うものの、21・31の2点以外はすべて宇津ノ台式に由来する属性を備えている。

以上のように、新潟平野北部における中期後葉～末の土器群における宇津ノ台式系要素の卓越性・支配性は驚くほどであり、戦前以来の「山草荷式」土器の理解は全面的に改めるべきである。これらの土器群に先行する中期前～中葉の土器群には、西郷遺跡の1点（第5図11）以外は秋田方面の土器およびそれに由来する属性を確認することはできない。したがって、秋田方面で宇津ノ台式土器が形成されたのち、その分布圏を新潟平野北部まで一気に拡大したと考えなければならない。しかも、これまでに確認された資料数や遺跡分布から考えると、宇津ノ台期の遺跡数は秋田方面よりも新潟平野の方が多い可能性すらある。しかし注意が必要なのは、宇津ノ台式土器が本来の内容を維持したままではなく、小松式土器の櫛描き手法を採り入れた③類型が常に組成し、さらに小松式土器（④類型）や川原町口式（①類型）と共存する地域圏を形成していることである。そして、中期前葉以来姿を消



第7図：宇津ノ台式系統が支配的な阿賀野市狐塚遺跡の副葬土器群

していた台地や丘陵上に占地する遺跡が、この段階にふたたび村上市滝ノ前遺跡（石丸ほか 2003）・山元遺跡（滝沢ほか 2009）に出現する。この時期に台地上に占地する遺跡は能登の邑地潟地溝帯の細口源田山遺跡や千曲川・信濃川流域の栗林式土器分布圏では認められるが、新潟平野北部のこれら遺跡の場合はむしろ秋田方面の集落占地方式が導入されたとみるのが適切であろう。村上市滝ノ前遺跡・山元遺跡は、これまで高地性集落という性格が指摘されてきたが、しかし宇津ノ台式段階では通常の集落立地の一類型とみるべきである。山元遺跡の場合は、同じ丘陵上に占地するとしても、小規模な環濠をめぐらす弥生時代後期後半期の集落のみを高地性集落と呼ぶべきではないかと考える。

おわりに

以上、男鹿半島の弥生時代中期の遺跡の立地と動向を、新潟平野北部の同時代と関連づけながら考察してきた。要約すると、第8図のように、中期前葉～中葉は北陸の小松式土器が新潟平野北部まで分布を拡大して定着し、秋田方面では在来系土器に小松式の間接的影響が加わることによって横長根A式土器が成立する。この段階に北陸において発展した農耕社会の影響のもとに、男鹿半島東部の砂丘列上や、低地を望む台地の縁に、小規模ながら各所に集落が営まれ、砂丘と台地に沿う低地に灌漑水田が造成されたと考えられる。しかし、新潟平野北部と男鹿半島の砂丘地帯という地形環境にあっても豊富な用水を確保する灌漑水田の確保は困難であったに違いない。この両地域では、低地にあっても小規模居住域が散漫ながら面的なまとまりをもつ弥生時代中期の仙台平野や津軽平野のような遺跡群も、また佐渡や中越以西の大規模に集住する集落も維持が困難であったと考えられる。

そして中期後葉～末になると文化動態のベクトルは逆転して、横長根A式土器の後継型式である宇津ノ台式土器が分布圏を新潟平野まで拡大し、小松式土器や川原町口式と共存し、小松式土器と折衷する複合的な型式構成をとる地域圏を形成する。そして、宇津ノ台式系統の土器は、さらに西方の長岡市（旧和島村）松ノ脇遺跡（丸山 1998）、佐渡市平田遺跡（坂上ほか 2000）・浜端洞穴（立教大学 1969）、石川県志賀町（旧富来町）高田遺跡（橋本 1974）でも検出されている。東北でも中～北部に起源をたどれる土器が中期後葉～末の北陸に姿を現わすのは、おそらく後期初頭～前半に日本海側タイプの天王山式土器が北陸各地に点々と見出されることの先駆けとなったに違いない。こうして、紀元前2世紀から紀元後1世紀までの間、北陸から東北地方にいたる数百kmにもおよぶ広範囲の地域を舞台として、南・西から、あるいは北からと相互に交流しながら、それぞれの地域社会が大きく変貌するための文化的・経済的な蓄積を達成していった。そこでは、日本海という大きな内海の沿岸流を利用して、西・南から準構造船、北からは丸木舟が行き交っていたはずである。

このように男鹿半島と新潟平野北部域における弥生時代中期の遺跡群は、相互に関係をもち続けたと考えられる。本稿では、約200kmも離れた2地域を関連づけたが、本来は中間地域も俎上にのせるべきであることは言うまでもない。しかし、両地域の間の海岸部に位置する弥生時代中期の遺跡は、山形県鶴岡市三瀬にある宮ノ前遺跡（佐々木 1976）と新潟県村上市（旧山北町）府屋にある間ノ内遺跡（須藤 1987）の2遺跡のみである。宮ノ前遺跡は、頸部に沈線による重菱形文を描いた宇津ノ台式の甕破片1点が報告され、庄内平野から南に隔たった小河川・三瀬川右岸の砂丘性の斜面で採集されたと推定されている。間ノ内遺跡では、3条の櫛歯で頸部に大振りの菱形を描き頸部文様帯の下にジグザグ文を添えた山草荷タイプの宇津ノ台式に属すほぼ完形の甕1点が掘り出されている。新潟県最北端を流れる大川がつくる小平野の海岸部に形成された砂丘の内陸寄りに位置する。中間地域のわずか2遺跡も砂丘に形成された遺跡であることは偶然ではないであろう。本荘平野の本荘砂丘、庄内平野の庄内砂丘一帯にも弥生時代中期の遺跡が存在するはずであり、本稿で取り上げた両地域間の約

200km の空隙の実態が明らかになる日を心待ちにしたい。

【注】

- (1) 天王砂丘は秋田平野臨海部の秋田砂丘と一体をなす。男鹿市域を脇本砂丘と呼ぶこともある。
- (2) 砂丘形成を遺跡の時期をもとに復元する新潟古砂丘研究グループとは別に、近年、砂丘砂層や砂丘間凹地の腐植土および砂丘基盤層中に含まれる有機物の ^{14}C 年代測定により、各砂丘の形成年代が求められ、新砂丘Ⅰ-1≒約 6000 年前から新砂丘Ⅲ-2≒約 1100 年前と復元された(鴨井ほか 2006)。しかし、約 3500 年前に形成されたとされる新砂丘Ⅱ-2 にある新潟市江南区笹山前遺跡(酒井・廣野 2002)では、約 6500～6000 年前の縄文時代前期前半の包含層が残されており、大幅な修正を要する部分がある。
- (3) 阿賀野市域の 3 遺跡のうち六野瀬遺跡(石川 2000)と山ノ下遺跡(石川 2005b)については本文中で触れえないので補記する。山ノ下遺跡では小破片ながら、南御山 2 式というよりも仙台平野の高田 B 式とみるべき資料があり、六野瀬遺跡では南御山 2 式古段階と小松式系土器がある。阿賀野川ルートでの東北中・南部と北陸世界との接点という性格を読み取ってもよいであろう。
- (4) 新潟砂丘と男鹿半島の天王砂丘とでは、弥生時代の水田経営に大きな条件の違いがあることにも注意する必要がある。天王砂丘一帯では河川水が決定的に不足する地形環境であるのに対して、新潟砂丘は平野東方の山地から流れ下る河川が多数あり、砂丘列内陸側にそって南北に流れる地形となっている。

【挿図出典】

- 第 1 図： 左＝白石 1990，右＝天王砂丘のみ白石 1990 を参照して石川作図。
 第 2 図： 児玉 1984a・b より作成。
 第 3 図： 児玉 1984b より作成。
 第 4 図： 地形分類図のみ海津・鈴木 2006 を用いて石川作図。
 第 5 図： 石川作図。

【参考文献】

- 荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤学・赤塚享 2004『青田遺跡』新潟県教育委員会
 石川日出志 2000「南御山 2 式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第 11 号，pp.1 - 22.
 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第 120 号，pp.47 - 65.
 石川日出志 2005a『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書，明治大学。
 石川日出志 2005b「弥生時代再葬墓に近接する生活遺跡の試掘調査」『考古学集刊』特別号，pp.17 - 33.
 石川日出志 2005c「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第 17 号，pp.7 - 24.
 石丸和正・金子優子・酒井亜紀・滝沢規朗・野田豊文・野水晃子・八木勝枝 2003「新潟県岩船郡内における弥生時代中期～後期にかけての様相一村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に」『三面川流域の考古学』第 2 号，pp.45 - 117.
 泉明・児玉 準 1984「若美町牛込遺跡の土器について」『男鹿半島研究』第 13 号，pp.1 - 9，男鹿地域研究会。
 磯村朝次郎 1966「男鹿半島出土の弥生式土器」『男鹿市文化財調査報告』No.6.
 伊東信雄 1960「東北北部の弥生式土器」『文化』第 24 巻第 1 号，pp.17 - 45.

- 海津正倫・鈴木郁夫 2006「越後平野とその周辺」『日本の地形 5 中部』 pp.140-147, 東京大学出版会.
- 卜部厚志・高浜信行 2002「新潟平野・西蒲原地域における縄文時代中期の古地理」『新潟考古』 13, pp.7 - 16.
- 大木直枝・中村五郎 1970「山草荷 2 式土器について」『信濃』 第 22 巻第 9 号, pp.39 - 60.
- 大坂 拓 2010「田舎館式土器の再検討」『考古学集刊』 第 6 号, pp.39 - 66.
- 大高博康(編) 1984『延命寺台遺跡発掘調査報告書』男鹿市教育委員会.
- 奥山 潤 1966「志藤沢文化」『男鹿市文化財調査報告』 No.7.
- 鴨井幸彦・田中里志・安井賢 2006「越後平野における砂丘列の形成年代と発達史」『第四紀研究』 第 45 巻, pp.67 - 80.
- 利部修・三嶋隆儀・小林克 1988『一般国道号線八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I—寒川 I 遺跡・寒川 II 遺跡—』秋田県教育委員会.
- 黒崎町史編さん原始・古代・中世部会(編) 1998『黒崎町史資料編 I 原始・古代・中世』黒崎町.
- 小玉 準 1975『男鹿半島研究別冊 男鹿半島の弥生式土器—日本海海上交通史の一断面—』男鹿地域研究会.
- 児玉 準 1984a『三十刈 I・II 遺跡』秋田県教育委員会.
- 児玉 準 1984b『横長根 A 遺跡』秋田県若美町教育委員会.
- 児玉 準 1987「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第 2 号, pp.35 - 88.
- 児玉 準 2011「秋田の米づくりのはじまりを追う」『秋田の米づくりはじまる—2000 年前から現代へ—』, pp.9 - 20, 男鹿市教育委員会・明治大学古代学研究所.
- 酒井和男・廣野耕造 2002「新潟砂丘における居住の初源」『新潟考古』 13, pp.17 - 24.
- 坂上友紀・田海義正・高橋保 2000『平田遺跡』新潟県教育委員会.
- 佐々木七郎 1976「砂丘出土の土器」『庄内考古学』 第 13 号, pp.21 - 25.
- 佐藤友子・杉田和宏・高橋保雄・安西雅希・中根秀二 2009『庚塚遺跡・狐塚遺跡』新潟県教育委員会.
- 島田祐悦・根岸洋 2005「雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第 19 号, pp.45 - 62.
- 白石建雄 1990「秋田県八郎潟の完新世地史」『地質学論集』 第 36 号, pp.47 - 69.
- 白石建雄 2005「男鹿半島と八郎潟・秋田平野」『日本の地形 3 東北』 pp.258 - 268, 東京大学出版会.
- 須藤 隆 1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』 第 33 巻第 3 号, pp.72 - 109.
- 須藤 隆 1987「山草荷式土器」『弥生文化の研究』 第 4 巻, PL.27.
- 関雅之・阿部朝衛・石川日出志・島吾郎 1988『豊栄市史 資料編 1 考古編』豊栄市.
- 高瀬克範 2010「レプリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究—秋田県域出土土器を対象として—」『貝塚』 66, pp.1 - 18.
- 高橋忠彦(編) 1982『脇本埋没家屋第四次発掘調査報告書(小谷地遺跡)』男鹿市教育委員会.
- 滝沢規朗・澤田敦・斎藤準・肥塚隆保・田村朋美・吉田邦夫 2009『山元遺跡』新潟県教育委員会.
- 田中久夫・長谷川正・木村澄枝・岡本郁栄・坂井陽一 1996「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』 第 35 巻, pp.207 - 218.
- 富樫泰時 1967「男鹿市脇本埋没家屋遺跡出土の続縄文土器について」『物質文化』 10, pp.15 - 22.
- 土橋由理子 2009『一般国道 49 号線亀田バイパス完形発掘調査報告書 II 西郷遺跡・大蔵遺跡』新潟県教育委員会.
- 新潟県(編) 1983『新潟県史資料編 I 原始・古代 1』新潟県.
- 新潟県地盤図編集委員会(編) 2002『新潟県地盤図』新潟県地質調査業協会.

- 新潟古砂丘研究グループ 1974「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史 I—」『第四紀研究』第 13 卷, pp.57 - 70.
- 根岸 洋 2005「志藤沢式土器の研究(1)—秋田大学所蔵資料の再報告を中心に—」『秋田考古学』第 49 号, pp.1 - 33.
- 根岸 洋 2006「志藤沢式土器の研究(2)—秋田県内の弥生前期・中期の土器編年について—」『秋田考古学』第 50 号, pp.1 - 23.
- 根岸 洋 2007a「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 資料編 考古』, pp.407 - 442, 横手市
- 根岸 洋 2007b「もう一つの志藤沢式土器—奥山潤氏の型式設定資料をめぐって—」『秋田考古学』第 51 号, pp.27 - 36.
- 橋本澄夫 1974「高田遺跡の調査概要」『富来町史』資料編, pp.329 - 360, 富来町.
- 平田貴正・百瀬正恒・鈴木俊成 2009『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 X X X I 桂木田遺跡』新潟県教育委員会.
- 福海貴子 2003「八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡 I』pp.125 - 169, 小松市教育委員会.
- 古澤妥史・酒井亜紀・石田守之 2003『大割遺跡・猫山遺跡・大曲川遺跡』新潟県京ヶ瀬村教育委員会.
- 古澤妥史 2010『猫山遺跡確認調査報告書』阿賀野市教育委員会.
- 松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論』第 57 卷, pp.720 - 738.
- 丸山一昭 1998『松ノ脇遺跡』新潟県和島村教育委員会.
- 水野 裕 1966「八郎潟周辺の砂丘について(予察)」『弘大地理』2, pp.6 - 8.
- 安井賢・鴨井幸彦・小林巖雄・卜部厚志・渡辺秀男・見方功 2002「越後平野北部の沖積低地における汽水湖沼の成立過程とその変遷」『第四紀研究』第 41 卷, pp.185 - 197.
- 立教大学考古学研究会 1969『佐渡浜端・夫婦岩洞穴遺跡』立教大学考古学研究会.

『古代学研究所紀要』第17号 正誤表

誤まりの位置	(誤)	(正)
27頁 挿図キャプション	第7図 宇津ノ台式系統が支配的な阿賀野市 狐塚遺跡の副葬土器群	第8図 弥生時代中期における北陸～東北中部日本 海側地域間関係の変化
27頁 挿図内植字	宇津ノ木台式分布圏	宇津ノ台式分布圏
29頁 挿図出典	第5図：石川作図	第5図：土橋2009より作成，第6図：石丸ほか 2003より作成，第7図：佐藤ほか2009より作成， 第8図：石川作成。